おおさか KEY わーど 第83回

なにやら、境内が賑わっているそうな。

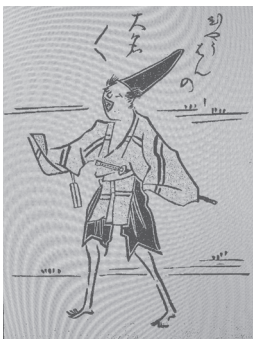
ひとつ参詣しようやおまへんか……

ということで、地下鉄谷町九丁目に近い生國魂神社に来てみると、大阪での落語の始祖とされる初代米沢彦八（？～1714）にちなんだ「彦八まつり」が開かれ、奉納落語会や落語家の屋台が出て活気にあふれている。

この催しは、京の露の五郎兵衛、江戸の鹿野武左衛門とともに落語の元祖である米沢彦八を顕彰する「彦八の碑」が建立されたことをきっかけに、毎年9月に開催される。（第27回となる今年は9月2日と3日）

かつて生國魂神社の境内は、演芸の一大拠点であった。宝永7（1710）年の浮世草子『御入部伽羅女』の挿絵をみると、歌祭文、万歳、太平記読みなど、さまざまな演芸の小屋が描かれ、「当世仕方物真似」の看板をかかげた彦八の姿もそこに見られる。

「当世仕方物真似」は、武士から船頭、市井の老若男女のしゃべり方や仕草を、立烏帽子、大黒頭巾、編み笠、湯呑茶碗など小道具を用いて活写する芸であったらしく、とりわけ彦八は、大名に扮するのが得意だったようだ。ひょろひょろした線で人物を描いて特色ある鳥羽絵の画集『鳥羽絵三国志』では、「評判の大名、大名」という宣伝文句に、烏帽子をかぶっておどける彦八が描かれている。



「鳥羽絵三国志」より
米沢彦八とされるおどけた人物

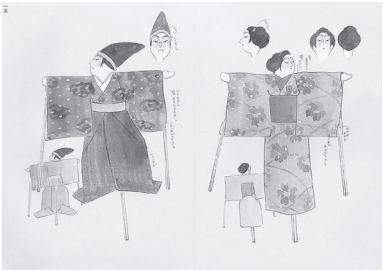
軽口と呼ばれる話芸も達者で、ネタを集めて『軽口御前男』『軽口大矢数』なども出版された。昨年、彦八を主人公にした小説、木下昌輝『天下一の軽口男』（幻冬舎）が発表された。

そのとき、どこからか口上が……。

さて、これより登場いたしますのが、「生玉人形」でござーい！

小屋掛けしている訳ではないので、気張って口上を述べなくてもよいのだが、彦八がモデルともされる大阪の玩具が「生玉人形」である。竹串を操作して両手を動かす小さな操り人形で、文楽の本拠地である大阪らしい郷土玩具だ。

元禄年間（1688～1704）にさかのぼる可能性がいわれるなど歴史は古く、『五畿内産物図会』



作者　川崎巨泉『巨泉玩具帖』　生玉人形　七種　其一
（大阪府立中之島図書館 人魚洞文庫蔵）

（1813年）には、摂津の名物として、虎屋の饅頭、四ツ橋の煙管と同じ画面に描かれている。近代では、日露戦争の時分、生國魂神社裏門付近に住んだ前田直吉が制作し、法善寺境内の駄菓子屋で販売されていたという。

「おもちゃ絵」を得意とした川崎巨泉（1877～1942）が、大正・昭和前期の郷土玩具を集めた『巨泉玩具帖』に生玉人形を7種類とりあげているし（大阪府立中之島図書館「人魚洞文庫データベース」）、グリコのおまけを企画デザインした宮本順三（1915～2004）も《浪花郷土玩具集》（国立文楽劇場蔵）に「生玉人形」を描いている。

この三番叟を舞うとされる烏帽子をかぶる人形だが、島之内に生まれ、大阪の文化芸能に詳しい肥田晧三先生は、これこそが得意の物まねで大名を演じている米沢彦八ではないかとされる。

そして、肥田先生がご所蔵の二体の「生玉人形」は、イラストレーターの成瀬國晴画伯と娘さんの麻美さんが修復復元し、生國魂神社に奉納された。生國魂神社から、米沢彦八、彦八から生玉人形、人形から生國魂さんという黄金のトライアングルの復活だ。

大阪の郷土玩具は、大阪ガス・エネルギー文化研究所が出している「上町台地 今昔タイムズvol.7 伝説の生玉人形とたどる ものづくりと文化の原風景」2016年秋・冬号にも紹介され、戦災によって伝統が途絶えていた「生玉人形」は、再び現代によみがえろうとしている。（http://www.og-cel.jp/project/ucoro/pdf/timesVol07.pdf）

本来子どもの玩具だが、ストレスの溜まった昨今ならば、ひとりで人形を操って、勤務先の諸氏をはじめ、芸能人や政治家のものまねをし、ブツブツぼやきながら遊んでしまいそう。

筆者プロフィール
橋爪 節也　はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。